

## はじめに

行事が終わったときや卒業式・修了式の後など、「教師になってよかった」としみじみ感じることも多いのではないのでしょうか。教師という仕事は、やりがいと喜びに満ちた仕事です。

しかし、あまりにも仕事量が多く忙しかったり、保護者への対応で消耗したり、子どもへの指導がうまくいかず苦悩したりと、非常に大変な仕事でもあります。時には、その大変さに飲み込まれてしまうことも起きます。

精神的な不調に陥ったときは、周りの人に相談したり、病院を受診したりすることが大前提です。普段、子どもたちに「大変なときは、身近にいる信頼できる大人にSOSを出しましょう」と、適切な援助希求行動ができるよう指導していることと思いますので、それを自分にも当てはめることになります。

その上で、この本をご活用ください。ここで紹介する「お守り言葉」の中には、納得したり共感したりでき、気持ちが落ち着き、元気が湧いてくるような、ご自身に合った言葉がきっとあると思います。

\*

この本は、学校現場で奮闘する先生たちが、自分自身を“お守り”のように支えてくれている本音の言葉を紹介するものです。

特にしんどい思いをしがちな、次の3つの場面についてエピソードを交えながらまとめていただきました。

- ①あまりにも仕事量が多く忙しいとき
- ②保護者への対応で消耗したとき
- ③子どもへの指導がうまくいかず苦悩したとき

それぞれが、第1章、第2章、第3章となっています。

まず、多忙さについて、本書で執筆者の先生たちが述べている状況を拾ってみます。

- ・仕事と家事・育児に追われる毎日でした。(中略)すべてが回らず、毎日仕事は持ち帰り。帰宅しても家事の山。子の寝かしつけと同時に自分も寝てしまい、よれよれになりながら夜中に食器を洗ったり、仕事をしたりしていました。
- ・悉皆参加の研修とその報告書作成、誰が読むのかわからない指定研究の紀要づくり、必要性を感じない校外の会合への参加などが、次から次へと日常の勤務に割り込んできます。
- ・子どもたちが下校した後の教室。提出箱には、まだ丸付けをしていないプリントや、目を通してないノートの山。後ろめたい気持ちを「後でやるから」とごまかしながら職員室に戻ると、添削を待つ作文の束。ため息をつきながら「そうそう、明日の職員会議の資料がまだできていないじゃないか」と校務パソコンの蓋を開けば、今度は期限が迫る仕事のメモがモニター画面の隅に何枚も貼り付いていて、さらに深いため息をつく。
- ・教師は、決まった仕事をこなすだけでなく、「子どもたちのためになる」と感じる仕事を思いつけば、とことん取り組もうとし

て、結局、自ら仕事を増やしていきます。特に授業準備は「これで完了！」というゴールを自ら設定しにくいものです。その最中に、生徒指導や保護者対応の事案が起これば、そこにも全力で向かっていかなければなりません。

読者の皆さんも、同様の思いをしていたり、したことがあるのではないのでしょうか。そして、このような忙しい状況の中、時間的にも精神的にも負担になるのが保護者への対応です。もちろん、保護者とともに子どもの成長を喜び合うすばらしい瞬間を味わえるのも教師の仕事ですが、ここでは本書で述べられているしんどい思いを拾ってみます。

- ・保護者対応での失敗については、あまり触れたくありません。遠い過去の出来事であっても、保護者から受けた怒りの感情を思い出すのはつらい、というのが正直なところ です。
- ・保護者とのコミュニケーションが良好にいくとは限らず、保護者の不信感や怒りが学校に向かうこともあります。その対応に時間を奪われると、教員は消耗し、疲弊します。忘れられがちですが、そこには「困っている子ども」や「困っている保護者」がいるだけでなく、「困っている教員」がいるのです。
- ・一方的な要件で突然訪ねてきたり、朝から電話で担任を1時間以上束縛したり、たまたま電話に出た先生の電話対応が悪かったなど、よくわからない理不尽な苦情を1時間も2時間も話し続ける保護者もいます。
- ・学校現場で発生する“つらい場面”を挙げれば多々ありますが、

生徒の指導をめぐる保護者と対立したり、思いが通じ合わなかったりする状況は、その中でも格別といえるでしょう。自分が当事者のときばかりでなく、同僚がそのような目に遭っているのを端で見ていたとしても、つらくなってしまいます。通常業務だけでもヘトヘトなのに、個別対応の時間や心理的負担は大変なものです。すっかり自信を失い、心身のエネルギーも消耗して、職場に行くのもしんどく感じます。

そして、子どもへの指導で悩むこともあります。

- ・生徒への指導がうまくいかないケースは大きく3つあると考えています。1つ目は生徒が反抗・反発しているとき、2つ目は生徒の意欲が低下しているとき、3つ目は生徒に発達障害等があり指示をうまく受け入れることを苦手としているときです。また、この3つが複合的になっている場合も考えられます。この中で、特に精神的負担を感じるのが1つ目のケースではないでしょうか。
- ・中学受験や家庭環境などが直接・間接的な原因となって子どもたちの心が荒んでしまうと、通常の指導が子どもたちの心に響きません。一部の子どもたちではありましたが、その子たちによって繰り返される反抗的な言動に、私の心は潰れそうになりました。
- ・生徒指導の場面など、繰り返し話をしても、教師の思いが伝わらずに、解決への道筋がまったく見えないときもあります。無力感におそわれ、子どもたちに対して、新たなかわりをもつ

意欲が失われてしまいます。

- ・教師という仕事はまさに“滅私奉公”です。子どものために自分の感情を抑え、一人一人に寄り添うことを求められます。ところが荒れている教室では、子どもたちはそんな担任の気持ちなんてまったく知るよしもなく、好き勝手なことをしたり、担任に反発したり暴れたり、近年では学級経営がとても難しくなっています。

\*

このような大変な日々を、どのような言葉で自分自身を支え、元気に仕事を続けていったらよいのでしょうか。気になる章の、どのページからでもめくってみてください。見開き2ページにまともまっていますので、すきま時間に気軽に読めます。紹介された「お守り言葉」の中には、読者の皆さんにとっても「お守り言葉」になるものがあるかもしれません。

なお、似ている「お守り言葉」も出てきますが、重複をいとわず編集しました。そのような言葉は「力のある言葉」なのだと思うのです。

読者の皆さんが「明日も元気に学校に行く」ために、本書がお役に立てるよう願っています。

2024年1月

『月刊学校教育相談』編集部